

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05634・19K20840

研究課題名（和文）伝統文化振興策の受容と流用に関する人類学的研究：台湾原住民の織物制作を事例に

研究課題名（英文）Acceptance and diversion of traditional culture promotion policy : an anthropological study of textile revitalization of indigenous Taiwanese

研究代表者

田本 はる菜 (Tamoto, Haruna)

北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・博士研究員

研究者番号：20823800

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、台湾におけるオーストロネシア語族系先住民（台湾原住民族）の手工芸制作と、近年の政府による伝統文化振興策の関わりについて、とくに国際機関や諸外国から導入された伝統文化保護に関する理念や制度が、先住民による手工芸品の制作・流通プロセスにおいていかに受容され、また独自に活用されるのかを明らかにするものである。研究期間に行った現地調査とその分析から、文化振興策が地域に浸透する過程で、工芸品の製作・流通においては、ローカルな市場を対象とする経営戦略や、先住民と漢人の間の日常的紐帯の活性化といった、政策的想定を超えた展開が見られることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、モノの制作・利用を通じた先住民と文化振興策との関わりに焦点を当てることで、土着技術の記録を行ってきた物質文化研究と、先住民をとりまく政治的文脈を扱う先住民研究の二つの視座を架橋するという学術的意義を有する。また本研究は、先住民の伝統文化の保護と発展という国際的課題に対し、台湾という身近な地域がどのような成果と課題を有しているのか、実証的な知見を提供する。これは多文化の共生のためのルールづくりの過程にある、今日の日本社会にも有益な知見をもたらすものである。

研究成果の概要（英文）：This study examines how Austronesian-speaking indigenous peoples of Taiwan are involved in recent government's measures to promote traditional culture through handicrafts. In particular, it will explore the way in which the concepts and systems of protection of traditional culture introduced by international organizations and foreign countries are accepted and utilized by indigenous people in the process of production and distribution of the handicrafts. The field research conducted during the study period revealed the existence of unexpected and unique developments of the policy, produced through the process of spreading such measures to the region: management strategies targeting local markets and the activation of everyday ties between indigenous peoples and Han Chinese.

研究分野：文化人類学

キーワード：先住民 台湾原住民族 工芸 芸術 文化振興策 文化遺産 技術実践 クラフトの人類学

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、国家や国際社会との関わりの中にある先住民の工芸・芸術について、支配的な表象のシステムを問題にするのではなく、先住民の人々が技術的实践を通じて近代的制度をいかに受容し、また独自に流用するのかを明らかにすることを目的としている。これまでに、台湾の先住民(台湾原住民族)を対象に行った調査研究では、1990年代以降の政府による「原住民工芸」の振興が、制度的な文化の価値づけや表象を伴う一方で、新たな道具や技法の普及、作業空間の導入といった物理的・技術的な側面を少なからず持つことを明らかにしてきた。原住民の人々は、「伝統文化」や「工芸」という表象を、新たな技法や生産様式、商業スキルを学び、実践するという具体的過程を通じて受容しており[田本 2012] また他方で外来の道具や技術を、慣れ親しんだ素材の性質や身体動作、道具への愛着との兼ね合いから選択的に取り入れ、利用してきたこと[田本 2015]が明らかになっていた。

### 2. 研究の目的

本研究課題では、台湾原住民の織物にまつわる実践を対象とし、グローバルに流通する伝統文化振興の理念や制度が、原住民工芸の制作実践を通じていかに受容され、また流用されているのかを焦点に調査研究を行うこととした。1990年代後半から、台湾政府はユネスコや先進諸外国から導入した伝統文化保護の理念をもとに、認証制度や知的財産権などの新たな枠組みの整備を進めている。それらが原住民の人々による織物制作と利用を通じてどのように浸透し、また現地で独自の生産性を見出されているのかを民族誌的に明らかにすることが、本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

#### (1) 1990年代以降の原住民文化振興策の展開に関する調査

台湾における原住民の伝統文化振興策がどのような理念と目的に基づいて推進されているのか、またその過程で国際機関や先進諸外国の枠組みをどのように参照してきたのかを、台湾政府の行政資料、報告書および関連機関へのインタビュー調査によって把握する。また各地域の自治体や民間組織が、それらの理念や目的をどのように具体的なプロジェクトとして立案し実行してきたのかを、事業計画や報告書をもとに明らかにする。

#### (2) 文化振興策のもとでの織物制作・流通についての調査

織物制作に携わる原住民の人々が、文化政策に基づく取り組みや施策をどのように受容し、また流用しているのかを明らかにするために、原住民集落と近隣市街地において参与観察を実施する。具体的には、90年代の文化振興策によって各地でみられるようになった、小売店舗を兼ねた織物工房と、行政自治体が不定期に実施する技術講習会を中心に、織物の制作・流通にまたがる過程についての参与観察を行う。とりわけ、原住民の織り手による日常的な織物制作や技術習得、周辺地域を含めた布の流通と利用、評価の実態について、文化振興策やその取り組みがどのような影響をもたらしているのか、あるいはしていないのかを明らかにする。

### 4. 研究成果

本研究で得られた最も大きな成果は、原住民文化産業の個別地域における独自の展開を、原住民と非原住民のあいだで生じている協働に注目して明らかにしたことである[田本 2019]

民主化の進展と原住民族運動を経た1990年代以降の台湾では、多文化社会のシンボルとしての原住民文化の再評価が進むとともに、国際社会の潮流を意識したクリエイティブ産業への国家的関心の高まりを背景に、原住民の工芸・芸術分野の産業振興が図られてきた。これを通じて、原住民とかれらの市場への参入をサポートする漢人との商業的な連携が見られるようになったが、こうしたエスニシティを超えた協働の実態は、先行研究では十分に取り上げられてこなかった。本研究では、文化産業に従事する原住民の市場への対応、そこでの非原住民との協働のあり方について、南投県でのフィールドワークをもとに分析・考察した。

ブランド化を前提とした原住民文化産業の推進は、工芸分野で少数の成功者を生み出したが、原住民による大多数の工房はブランド化に至らず、廃業を余儀なくされることになったことがこれまで指摘されてきた。一方、南投県で行った調査からは、ブランド化とも廃業とも異なる形で原住民文化産業が展開していることが明らかになった。南投県における原住民セデックの工房の事例からは、オーナーたちが不特定多数の消費者からなる中央市場での成功に関心を持っておらず、自身にとって馴染みのある地理的範囲、人々を「市場」として工房を営んでいることが示された。また工房に出入りする漢人たちとの関係に注目すると、セデックのオーナーにとって漢人は権益を脅かす存在ではなく、かれらは商売上の協力関係を越えて、プライベートな行き来をする親密な関係を結んでいた。さらにこうしたエスニシティを超えた紐帯が、調査地一帯で行われてきた疑似的親族関係のようなローカルな関係構築の原理に支えられている場合があることを明らかにした。ここから、原住民文化産業の展開を成功/失敗として一律に論じるのでは

なく、原住民と非住民からなる地域コミュニティの特質をもとに理解するという新たな理解の方向性が示された。地域に根差した原住民文化産業の展開を明らかにする本研究の知見は、ローカルな文化が単に消滅するか保護されるかの道筋をたどるのではなく、「伝統文化の消滅と保護」という支配的なロジックと接合しながら、独自の仕方でも維持されていく可能性に光を当てるものである。

<引用文献>

- 田本 はる菜、原住民工芸の表象と制作をめぐる一考察：台湾原住民の織物復興を事例に、史学、81 卷 3 号、2012、91 - 113
- 田本 はる菜、台湾原住民族の機織にみる「外来技術」の再編：南投県セデックにおける高機移入を中心に、台湾原住民研究、19 号、2015、103-135
- 田本 はる菜、原住民文化産業の地域的展開：族群を超えた協働に注目して、台湾原住民研究、23 号、2019、34-50

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田本はる菜	4. 巻 83(4)
2. 論文標題 宮脇千絵著 『装いの民族誌 中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田本はる菜	4. 巻 23
2. 論文標題 原住民文化産業の地域的展開：族群を超えた協働に注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 台湾原住民研究	6. 最初と最後の頁 34-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 田本はる菜
2. 発表標題 關於原住民文化産業地域性開展的研究：關注族群間的商業網路（原住民文化産業の地域的展開に関する一考察：族群間の商業ネットワークに注目して）
3. 学会等名 第11回台日原住民族研究フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田本はる菜
2. 発表標題 現代台湾における原住民と在来技術 セデックの織物、歌舞、祭儀の復興に関する人類学的研究
3. 学会等名 日本文化人類学会関東地区懇談会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田本はる菜
2. 発表標題 儀礼と歓待のあいだ：台湾セデックの共食における規範と不確かさ
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Haruna Tamoto
2. 発表標題 Politicization and Reinvention of Indigenous Textiles among the Seediq in Taiwan
3. 学会等名 The 17th Annual Conference of European Association of Taiwan Studies (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Haruna Tamoto
2. 発表標題 Post-disaster period and Reconstruction of Identity among the Indigenous Taiwanese
3. 学会等名 International Small Islands Studies Association Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 神本秀爾、岡本圭史、安井大輔、山本達也、田本はる菜、高村美也子、藤井真一、河野正治、清水貴夫、吉田早悠里、中尾世治、河西瑛里子、山内熱人、溝口大助、山野香織、高田彩子、宮本聡、菅沼文乃、大津留香織、小西賢吾、中屋敷千尋	4. 発行年 2020年
2. 出版社 集広舎	5. 総ページ数 312
3. 書名 マルチグラフィト 人類学的感性を移植する	

1. 著者名 藤野陽平、奈良雅史、近藤祉秋、堀田あゆみ、モリカイネイ、小林宏至、市野沢潤平、大道晴香、田本はる菜、塚原伸治、吉田ゆか子、飯田卓、櫻田涼子、高山陽子、久保明教、原知章	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 モノとメディアの人類学 身近なものから見る世界（仮題）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----